

農村女性 第21号 ネットワーク通信

H24年1月

新年あけましておめでとうございます。

今年も農村女性リーダーの皆さまのご活躍をお祈りいたします。



男女共同参画推進フォーラム

平成23年12月8日(木)午後1時から、こうち男女共同参画センター「ソーレ」で、男女共同参画推進フォーラム～女性農業者の経営参画に向けて～が開催されました。参加者は、農村女性リーダーや農漁村女性グループ研究会員、農業振興センターの担当職員など39名で、基調講演とパネルディスカッションが行われました。



もし農業の担い手が「ドラッカーのマネジメント」を読んだら

1 基調講演

○演題:女性農業者の経営参画

○講師:寺本 毅彦(寺本経営コンサルタント事務所)



経営学者のP.F.ドラッカーの質問「何をもって憶えられたいか」「企業とは何か」を引用して、事業経営の志・理念の大切さや、「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーのマネジメントを読んだら」(岩崎夏海(著))ならぬ「もし農業の担い手がドラッカーのマネジメントを読んだら」と題してマネジメントの重要性についてのお話がありました。

そのなかで、マネジメントを考えるポイントとしては、作ったものをどう売るかではなく、顧客を満足させることが企業の使命・目的であり、お客さまが何を欲しがっているのが重要であり、お客さまが欲しがっている商品をつくることである。マネジメントを今後考えていくヒントとしては、顕在化しているニーズ(20%)への対応ではなく、潜在化している欲求であるウォンツ(80%)を見つけることであり、そこに価値が生まれるなどのお話がありました。



2 パネルディスカッション

○テーマ:もう一度見直そう食の安全・安心

○コーディネーター:寺本 毅彦 ○アドバイザー:永尾 朱美(県普及職員OG)

○パネリスト:山本 美加、池内 真弓、西込 寿恵、澤田 智恵、松村 一恵



西込 寿恵(高知地区)

夫の祖父の代から柑橘農家で50周年を迎える。生産者として、消費者として、今年ほど食の安心・安全を考えた年はなかった。スーパーで被災県の野菜が並んでいると、一瞬ためらってしまう自分自身を情けなく感じたこともある。

これからTPP参加で安い輸入品が入ってきても、国内の農家はルールをきちんと守り、安心・安全をPRしていくことが大事だと思った。

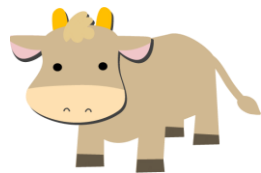
農薬等の決められたルールは絶対に守る。トレーサビリティ・ポジティブリストを徹底し、これまでは恥ずかしかったが、商品には顔写真もつけて、生産者としての責任感を自覚したい。消費者に信頼される農家になりたい。高知県を元気にするのは高知の風土を活かした仕事である農業だと思う。



澤田 智恵(嶺北地区)

土佐褐毛牛とこだわりの米作りに携わっているが、畜産業界は非常に厳しい状況、その対策として数年前、土佐赤牛を知ってもらおうと思い、中央公園からスタートしてはりまや橋まで街中を、土佐赤牛を連れて練り歩いた。

畜産業界は、世界的な問題となったBSE、口蹄疫、3月地震による放射能のワラ問題と数多くの問題を抱えている。今年になってTPPが騒がれているが、それ以前から輸入肉のずさんな管理を見ては腹立たしく感じている。また、不安も感じており、安心・安全のためにも地産・地商に力をそそぐべきだと思っている。日本ほどきちんとしたトレーサビリティの管理ができていない国はないと思う。



松村 一恵(中央東地区)

食べ物を作っているのではなく、花き栽培農家なので、一消費者として発言させていただくが、昔は店頭と並んでいるものは全て安全と思っていたが最近は何か疑わしく思えてきた。やはり何かハッキリと証明するものが必要だと思う。

また、花き栽培は、自分たちの作った花を飾って

喜んでもらえるのが嬉しい。これからも、時代のニーズに対応しながら、皆が幸せになる仕事をしていきたい。



池内 真弓(高吾地区)

お茶を270a栽培しており、うち60aは有機栽培に取り組んでいる。有機農業を始めたきっかけは、直接消費者の声(アレルギー等)を聞いたり、子供の入院中に病院内の子供を見て「せめて口から入るものには安全なものを作りたい」と考えるようになったことである。

有機茶を始めて17年、生産量は以前と比べて増えている。量販店や直売所で売っているが、特定のお客様をターゲットにしてきたので、全て口コミで広がり、こちらから売り込みをかけたことはない。それでも生協から「このお茶は生協が望んでいたお茶です。」と言ってもらえた時には、本当に必要としてくれているお客様に買ってもらえる幸せを感じました。



山本 美加(幡多地区)

就農当初はナバナ・オクラ・シシトウ・キリユウなど多品目栽培でとにかく忙しく、赤字にはならないものの、自分の給料はとて取れない状況だった。これではいけないと、消去法でダメな品目から止めていながら、一方では規模拡大も進めてきた結果、現在はナバナ5ha、ラッキョウ2.6haを栽培し、25名を雇用している。経営は最初の3年間は厳しかったが、いつの間にか周りから認められる農家になっていた。

「農業＝ビジネス」と捉えている。従業員もアルバイトも「自分のお金は自分で稼ぐつもりで」と、プロ意識を持たせている。工作中、従業員の方と常に「こうなりたい、ああなりたい」と夢や希望を語るようにしている。目標がクリアできた時は皆で喜び、収穫が終わったら旅行や食事やボーナスで成果を表している。

〔その二〕

7月13日 一品持ち寄り座談会

この座談会は、仲間づくりを目的として行っていて、毎年恒例になっています。今年は一品持ち寄るのではなく、4名の女性リーダーに講師になってもらって、それぞれの地域の農産物を使ったの料理講習会を行いました。

今回、佐川の農業女性5名の方々が参加してください、皆さんとできあがった料理を、おしゃべりを交えて頂きながら交流をしました。

～メニュー～

山菜を使った山菜寿司

地乳を使ったリコッタチーズ

” でかでかプリン

細いパスタ

トマトを使った冷製カッペリーニ

トマトの水餃子



幡多地区農村女性リーダー講演会および農業振興センター職員との意見交換会

しまんとレディース(幡多地区) 山本 美加

9月27日に、講演会および幡多農業振興センター職員との意見交換会を行いました。

まずは、講演会。「起業の仕方について勉強してみよう」ということで、地元の農家も参加している「有限責任事業組合LLPしまんと」の方から講演をしていただきました。この会社は、地元のいろいろな職種の若手が「地元食材を活用し、商品開発・販売を通して地域の活性化を促すこと」などを目的として設立したものです。立ち上げメンバーの中に農家の方がいたことから「起業の仕方」と題してこれまでの取り組みの経過や、事業の活用について講演していただきました。

講師は、四万十市蕨岡のイチゴ農家、景平さん。

講演では、商品開発の取り組みやパッケージ、価格設定、流通事情、賞味期限の設定、活用した事業などの話を聞くことができました。大手の会社になってくると40%強の手数料がかかるという話には驚きました。また、地元の農家が異業種の方と連携して



こういった取り組みをしていることを知るよい機会となりました。

後半は、幡多農業振興センター職員との意見交換会。農業振興センターからは、所長、課長、チーフの方々6名に参加していただき、女性リーダー8名で意見交換を行いました。まず、女性リーダー個々の困っていることや課題について話をしました。安定した雇用の確保やタバコ廃作後の対応、販売単価や流通の事などについて発言がありました。それについて農業振興センター職員から、情報提供や今後の取り組みについて説明がありました。時間が短く、1つのことで時間を取った議論はできませんでしたが、農業振興センターの取り組みや他の女性リーダーの悩みなどを知ることができました。

次は、交流を深めることを目的に、フラワーアレンジメントでみんなが集まる予定をしています。

【編集後記】

前回、初めて編集をして要領もだいぶ分かってきたので、今回は編集委員4人が集まり、一晩でレイアウトや構成をすることができました。お互いエクセルの使い方を教えあって、スキルアップにつながる編集会議でした。

編集委員 西笛・能勢・島崎・松村

【お問い合わせ等は事務局まで】

高知県農業振興部環境農業推進課 担当 武井

電話 088(821)4535

ネットワーク通信はホームページでもご覧になれます。<http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/>

nogyosha/zyosei/